



人とAIと読書

「君は超がつく知性の持ち主だし、ぼくは向上処置も受けていないぼかな子だけど、いいよ。アドバイスでもなんでもする。なんでも聞いて」

カズオ・イングロさんの『クララとお日さま』の一節です。「ぼく」は十代半ばの少年。「君」はAIロボットです。

舞台は、人工知能が人間を超えるシンギュラリティが到来した近未来。子供たちは自宅で遠隔授業を受けており、子供同士の交流が乏しいため、子供の孤独を癒す「人工親友」のAIロボットが普及しています。

現実に、生成AIのチャットGPTが登場して、シンギュラリティが話題を呼び、それとともに人と機械の関係をめぐるさまざまな考え方が注目されるようになりました。

科学技術を用いて生物学的限界を超えた人間を生み出そうという思想（トランス・ヒューマニズム）が勢いづく一方、人工知能が人間を上回れば大量の無用者階級が生まれ、世界はディストピアへ向かうとの終末論も叫ばれています。

この両極端の間に、機械の方が主となる事態をも想定してマン・マシンの一体化をめざす



立場、あくまで人を中心に人と機械の共生を考えようとする立場、さらに人間の精神とコンピューターを同一視する風潮を批判する哲学者たちがおり、いくつもの考え方が併存したまま、収束しそうもありません。

『クララとお日さま』には、少女の意識をコンピューターに転写し、機械となって生き続ける少女を作ろうとする科学者が登場します。それに反発し、人の心だけはコピーできないと信じる父親と、苦悩しながら少女の生き写しのロボットを求める母親が物語を織りなします。

彼らが生きているのは、AIに仕事を奪われた大量の失業者がいる社会です。大人は働ける人と働けない人に分断され、子供は遺伝子編集による「向上処置」を受けられた子と受けられなかった子の二つの階級に隔てられています。

ディストピアと思える社会ですが、不思議と絶望はありません。登場人物たちには皆、利他の愛があり、AIロボットのクララは其中で愛の本質を理解していきます。

大きな変化の時代には本がたくさんヒントをくれます。好きな本を親しい人に贈る。先の見通せない時でも多くの人が幸せに生きられるよう、ギフトブックの習慣が広がることを祈っています。

公益財団法人文字・活字文化推進機構理事長
読売新聞グループ本社代表取締役社長

山口寿一